

荷車から解放された馬は走る気力もなくヨロ／＼と来た道を戻る馬もいた。

逃げ歩いた道程は五十キロ、山道には捨てられた衣類、夜具、骨つば、位牌まで……辺りは夕闇が迫っていた頃、辿り着いたところは軍川の山奥く流送飯場であつた。

食糧もなく、翌々日、日本の憲兵が来て、気の荒いソ連軍が真岡へ上陸したと言う、山へ逃げて一夜を明かした、鳥の羽ばたきにも脅えながら息を殺していた。

夜なかな中、山道を通る足音、ピュー／＼と吹く口笛、馬のいなゝきと車の走る音、話し声、恐ろしい野宿が何日続いたことか。

敗戦と云う混乱の最中で、目に見えぬ何かに守られて生きぬいた事を感謝せずにはいられないのであつた。

## 崩れた丸太と共に川に転落・瀕死の重傷

北海道 金田 善太郎

私が樺太に渡つたのは大正十五年八月である、釧路市鳥取町の富士製紙株式会社に入社知取工場に配属となつた。

昭和四年三月、西海岸の恵須取町に新工場が新設されるので、技術者というので命に依り転勤するため三月十七日知取出発、単身赴任である。

多数の友人に見送られ知取駅を出発、真縫駅にて下車、これより横断の山道へと向かう、馬ソリに乗って約二十八キロ、ここを五時間ばかりで山越えをし西海岸の久春内という村に着く、午後七時頃と思う、東海岸に比較すると下着一枚は暖かい、この夜はゆつくりと休む。

翌朝は早い午前六時出発、三月では未だ暗い、次の

宿舎のこともあるので出来るだけ早く発った、朝は寒い、徒歩と違って馬ソリの中、座っているのも何となく疲れる、お蔭で晴天で何よりであった、万一吹雪であつたなら何里も人家はなし、三里置き駅の駅通があるだけで困難したことと思つた。

五十キロの旅は午後六時に珍内という村に着く、疲労してきた、しかし、目的地恵須取工場では私共の到着を一時も早くと首を長くして待っていると思えば心は急ぐ。

次の宿舎はここより同じく五十二キロ鶴城村といふ小さな部落である。此の間に伊皿山道という山道にさしかかる、なに分にも見たこともない険しい長距離の山道ばかりであつた、鶴城の宿で一泊、翌日はいよいよ恵須取。

恵須取迄は三十六キロ、此の朝は少し落ち着き朝七時出発、通称二〇三高地にさしかゝる、人馬の通つた跡もない早朝の雪道である崖の中腹に道をつけ間宮海峡を望む、断崖絶壁の下は波が白くたたきつけられて音が音は聞こえないくらいの高さである。

恐ろしい風景、まさしく二〇三高地という名称がピタリの呼び名であつた。

馬は道を知っているかのように然し注意深くのそり／＼進む、私は馬ソリから降りて歩くこと二キロの崖道をやつと過ぎ、普通の道路に入り、恵須取に到着、会社幹部の出迎え、歓迎を受ける、が皆初顔合せである。

休む間もなく翌日から直ちに工場の機械の点検指導に入りその夜は一睡もせず試運転にあたる、この会社は人使いの荒い会社だと思つた。

昭和六年の春には製紙業界にも不況の嵐が来て、昭和八年五月三社合併して大きな王子製紙となる、此の頃より日英米に経済戦争が始まつている。

昭和十五年紀元二千六百年にあたり在郷軍人会功勞者の一人として運よく私も選ばれ、総裁会長の井上陸軍大將から表彰を受ける、此の一枚の紙が後で災難にあふこととなつた。

昭和十七年頃と思う、満州の牡丹江に新設工場計画中と聞く、其処へ転勤の内定があつた。然し、發送し

た機械は現地に着かず中止となる。

昭和十八年には今のインドネシアやその頃はオランダ領時代、今の（ジャカルタ）ここに工場を計画、社員が出張したりした、私にも話があり勿論単身である、私も戦いは勝負がないことを密かに聞いている、海外行は断念してよかった。

昭和二十年六月仮の建物にて航空機燃料の松根油の採取をすることになる、私は此の現場を担当することになった、ボイラー付窯が三十一缶機取付、樺太随一、これを見学に来る人々が絶えない程であった、私はこの現場を成功させるため命がけであった、ボイラー炉作業は女性を雇用し、燃料の石炭は昼夜で十屯くらい使用した。

三十一缶の窯より出る黒煙は正に軍需工場そのものである、環流であるから作業は黒い顔になる私の勤務は一日十三、四時間にもなった日が多かった、責任上頑張った。

昭和二十年八月六日午後大きな飛行機一機と鳥が二、三羽飛んでいるかに見えた。

これがアメリカが誇る長距離爆撃機 B 29 とこれを守るグラマン戦闘機であった。

あとで判ったがソ連がアメリカから借りたもので、偵察に来たのであった。

その日の夜爆撃に数機が飛来、照明弾で真昼のような明るさには度胆を抜かれた。

十一日には日中堂々と爆撃を始めた、日本軍の戦闘機は一機も飛ばず制空権をとられていた。

八月十二日、女子供老人達の避難が始まった日中は立木林の中に隠れ夜暗くなつてから避難する、数十里の山道を子供を背負い、手を引き、子供の多い人は赤ん坊を草原に寝せたまま置き去りにした、老人は死亡、夫婦で自殺した医者もいたと云う。

男子は十五歳以上警備で残った、工場は全部ストップしたまゝである。

八月十五日終戦の詔勅放送があったが、まさかソ連が攻めて来るとは考えていなかった。

八月二十二日太平炭山が爆撃されソ連兵が攻めてくると云う情報に炭砒病院の看護婦達が自殺を計り生き

残った看護婦の泣いている姿を見て思わず涙がでた、又真岡の交換手が、これが最後ですと告げて全員自殺した事を知らされた、あまりにも無残な犠牲である。

私はソ連軍に逮捕された、その理由は避難して空家になつてゐる家を検査して廻つた時在郷軍人の役員や前記の感謝状などを見つけられてソ連の憲兵「ゲーバーウ」に連行された。

私達の監禁は有識者、指導者階級が殆どである。幾日かして船の荷役に駆り出された。

又造材山へと追われ経験もない仕事には困つたが負けたものの惨めさか、又、珍内の山奥に行き伐採した丸太の川流し、即ち流送をさせられた。

この山奥で積んである丸太が崩れ木材と共に川の中へ転落して瀕死の重傷を負つた。

山小屋の隊長カリニヤンコは今が気が張つてゐるが朝までもたないと言つて、朝まで枕元についてくれた。

私はソ連兵に逮捕され処刑とまで云われ一度は死んだ身だ、今ここで死んではいられないと頑張りました、日蓮宗のお守りと不動明の札は二ツに割れていた。

命をとり止め、半月くらいで軽い仕事に出れるまで回復して隊長は大変喜んで度々見舞に来てくれた、あの時死んでいたら彼は殺人罪になるところである。

又サイ口造りもやらされて困つたがどうにか完成させ場長にほめられご馳走になつたこともあつた。

製紙工場も再開、各所の機械も順調に運転させて申し送つたりして昭和二十三年七月二十三日何の予告もなく、一時間以内に港に集合せよとの命令で、いづれ引揚げは覚悟はしていたがあまりの突然にあわてたものです。

ソ連の貨物船の甲板に六十人の家族と共に乗船したが雨と風で濡れとなり子供達を守るのに大変であつた。

翌日女学校であつた収容所に入つて引揚船を待つ事一か月くらいやつと日本の引揚船に乗り込んだが船内は高温で多数の病人が出たが、どうにもならなかつた。

八月二十四日函館港へ入港し各々縁故者を頼つて函館駅をあとにした。

戦後四十六年あの当時の記憶をたどつて書いて見ま

したが敗戦の惨めさ、哀れさを後世に語り継ぐもの  
あります。

引揚げてからの生活も人生のやり直して、この血の  
出る労苦が待っていたことをつけ加えておきます。

## 女の私たちが監視哨に立ち

北海道 西田 紀久子

男子青年は兵隊へ、女子青年が後を引継ぎ監視哨勤  
務をすることになりました。

忘れもせぬ昭和二十年八月十六日、ソ連の飛行機が  
飛んできました。

上恵須取市街に爆弾が投下され燃えています、アッ  
という間に監視哨を低空で狙って来ます。

その時の立哨に立っていたのが得地さんでした。哨  
長は「立哨おりろ」と命令する、得地さんはおりて外  
へ出たとたん、機銃掃射でバラバラとそばまで弾がき  
ましたが、幸に体にあたらずホットしました。

皆が防空壕の所へ集合全員山を下りるとのこと、い  
つもの道と反対に下り、川を渡って東の方へと歩き、  
夕方七時頃私の家の前を通りかかりましたので、哨長  
に「食事をしていきませんか」と言って家に入りました。

家には義兄と部落の人達五人おり、心強かったもの  
です。食事を終え、夜九時頃出発しました。

三時間経った頃、私ともうろうとしてねむけがして、  
皆と反対の方向へ歩き出すのを見て、「阿部さんどこ  
へ行くのー」と誰かが大声で言ってくれ、ハット目が  
さめました。

夜が明け、ある人家で食事をご馳走になり、ひと眠  
りしました。

日中は機銃掃射をあびるので、三日間夜だけ歩きよ  
うやく内路駅から汽車で豊原の監視本部へ着き、全員  
直立して隊長から終戦のことを聞きました、何が何や  
らわからず、うつむいたまま、すすり泣き無言のひと  
ときでした。

本部から宿を指示され、広い部屋に住むことになり